



デュルケーム世俗道徳論の中のユダヤ教：ユダヤの 伝統とライシテの狭間で

平田，文子

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2023-02-16

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3425号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482222>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

デュルケーム世俗道徳論の中のユダヤ教：ユダヤの伝統とライシテの狭間で

氏 名 ： 平田文子

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

論文要旨

序章では、現在までのデュルケーム研究を俯瞰した上で本研究の特徴を示した。「フランス社会学の祖」と目されたエミール・デュルケームは、実証主義者であり合理主義者であり、時として唯物論者であるとされてきた。そのため、「精神世界を有する人間として社会的事象を物として扱う」という彼の言葉は、「社会的事象を物として扱う」という文言のみが取り上げられ、「精神世界を有する人間」という言葉は、往々にして等閑視されてきた。デュルケームの精神世界をユダヤ教ラビの息子という彼の出自に焦点を当てて検証することが本研究の目的である。また、彼が活躍した 19 世紀後半から 20 世紀初頭のフランスでは、国民教育を教会権力から国家の手に移行させる施策が進められていた。そのため、「カトリック教義」に依らない世俗道德論を講義する大学教員が求められていた。その役に抜擢されたのがデュルケームであった。彼の研究手法としての実証主義と、思想としての宗教性は絶妙なバランスをもって彼の著作や講義録の中に表現されている。この実証主義と宗教性のバランスこそがユダヤ教特有の世界観によるものであると考えられる。ユダヤ教には、人間の抱く精神世界を形而上の問題に留めず、形而下の問題として説いてきた長い歴史がある。それがユダヤ教の世俗主義、実践主義と言われるもので、際立った特徴の一つとして認めることができる。このような特徴を有するデュルケームの道德観を、時の文部省高等教育局長ルイ・リアールと初等教育局長フェルディナン・ビュイッソンが見出し、世俗道德論を唱える人物として、国家による公教育制度成立の施策のための対カトリック教会のキーパーソンとして抜擢した。しかし、体制側としてもカトリック教会との確執を深めることは避けたかった。また、ドイツよりはましではあったものの、フランスにおいても反ユダヤ主義の風潮は明白な形で存在していた。そのためデュルケームは、高等師範学校に進学する頃からは故郷でのユダヤ教の儀式に参加することをやめていた。ルイ・リアールとの会談で共和主義への共感と科学に基づいた世俗道德論を樹立する意志をデュルケームが示したことも明らかにされている。このことから彼は、「ユダヤ教を棄てた」とされてきた。当時の宗教的な事情を考えると、デュルケームの学説にユダヤ教思想を踏まえることが避けられてきたことも当然であろう。キリスト教徒が大半を占める国家において、ユダヤ教徒がフランスの公教育制度の成立に力を貸していたことが明白になることは、キリスト教徒にとっては許しがたい事実であろう。そのことが特にフランス当国において、デュルケームの学説にユダヤ教思想を踏まえることが避けられてきた理由でもある。デュ

ルケーム社会学の誕生には、オーギュスト・コント、フュステル・ド・クーランジュ、カントやルヌヴィエの影響があったことが論じられてきた。このような著名な先人たちの学説がデュルケームにインスピレーションを与えたことは確かである。しかし、彼の学説にはそれ以外の学問体系がある。それが、長い歴史を持つユダヤ教のタルムード解釈にまつわる学問体系であるとするのが本論文の趣旨である。

第一章では、従来あまり取り上げられてこなかったデュルケームのユダヤ教徒としての痕跡について述べた。第一に、デュルケームの割礼の記録を示し、ユダヤ教徒共同体の言語（イディッシュ語）やその生活環境について述べた。第二に、中世以来デュルケーム家で受け継がれてきたタルムード解釈の集成（ヘブライ語活字体）を取り上げて、デュルケームが中世の偉大なラビ、ヨーゼルマン・ロスハイムの子孫であったことが明らかにされている事実について述べた。第三に、デュルケームの墓石の上に彫られたヘブライ語を邦訳して聖書由来のその言葉の意味を解説した。第四に、パリ市古文書館に保存されているデュルケームの埋葬記録を示した。そこには、「エミール・デュルケーム」ではなく、ユダヤ名の「ダヴィド」を残した「ダヴィド・デュルケーム」と記録されていた。このことから、彼が表面上はユダヤ教の儀式には参加しなかったものの、プライベートにおいてはユダヤ教徒として生きていたことを主張した。最後に、ユダヤ教徒の週刊誌 *Archives israélites* においてデュルケームがどのように語られていたかを示し、ユダヤ教徒側からのデュルケーム像について述べた。ユダヤ教徒達は、デュルケームを「我々の 同信者」と呼び、デュルケームの訃報を知らせる記事には、「ユダヤ教の儀礼を実践してはいなかったものの、彼の心はユダヤ教徒のままであった」と記されていた。

第二章では、フランスにおけるユダヤ政策下のデュルケーム一家について述べた。特に、ナポレオンのユダヤ政策について、政府当局からのユダヤ教徒への 12 の質問とユダヤ教徒名望家からの回答について検証した。また、ドレフュス事件をきっかけにフランスにおける反ユダヤ主義に関するアンケート調査が行われ、このアンケートのデュルケームの回答について筆者独自の見解を示した。

第三章では、デュルケームの社会的連帯論の基盤となる「人格の相互承認」の思想についてユダヤ教思想に論拠をおいて述べた。19 世紀に急激に発展した商業化の中で、デュルケームは道徳的な行為よりも利益追求を重んじる行為が優勢となる社会的風潮について危機感を抱いていた。私利私欲の感情を規制できなくなった社会は、道徳的秩序を失い混乱

状態に陥る。彼はこのような現象を「アノミー」と名づけて警鐘を鳴らしていた。デュルケームは「人格の相互承認」によって人々が道徳的な連帯を確保することがアノミーからの脱出の鍵となると主張した。デュルケームの主張する「人格の相互承認」については、今まで、社会学理論としての不十分さが指摘されてきた。しかし、「ユダヤの本質」と言われるユダヤ教の根源を為す思想に根拠を置いて解釈し直すことで、デュルケームの主張の本質が明らかになった。デュルケームは、個人の人格が否定され、人がモノ化するような人間関係が無機質とするのに対して、個人が人格ある存在として社会の一機能を果たすことが本当の社会的連帯のあるべき姿であるとし、このような連帯のことを「有機的」と呼ぶ。ユダヤ教においては、人格を持った存在者として人格を持った他者との関係を生起させることで神との応答関係が成立し、ヒトは神の被造物となる。人と人が有機的に結ばれている社会に神は存在し、そのような社会に人間の存在理由を自覚させる機能がある。これが「ユダヤの本質」といわれるものである。

第四章では、ユダヤ教の実践主義とデュルケームの道徳理論との関係について述べた。学校教育における道徳教育について、デュルケームは、学校集団の中で子どもたちに道徳的行為を習慣化していく必要性を主張した。つまり、「道徳とは」といった思弁に留まるのではなく、現実的な生活場面における道徳的行為の習慣化を重視している。このようなデュルケームの道徳理論は、ユダヤ教の道徳的行為の習慣化という手法を基盤としている。19世紀ドイツで起こったユダヤ学の一派の「信仰を生活の哲学」とする思想について考察し、デュルケームの父親がその一派の影響を受けていたことも取り上げてデュルケームの世俗道徳論とユダヤ教の実践主義との関係を示した。

第五章では、デュルケームの学説上のキーワードである「集合意識」という概念を、ユダヤ教の成文法の解釈の際に必要な口伝律法との関係から述べた。ユダヤ教には、文字として伝承されてきた「書かれた掟」と文字にはされずに継承されてきた「口伝律法」というものがある。特にユダヤ教においては、口伝律法の参照が重視されてきた歴史的な経緯を述べ、口伝律法を「書かれた掟」に反映させ、文字資料への偏った解釈を防ぐ手法が聖書解釈、すなわち「法」解釈には組み込まれてきたことを取り上げた。ラビは「書かれた掟」の解釈においては、口伝律法とともに伝承されてきた一定の精神的態度で臨むことが要請されている。つまり、デュルケームの「集合意識」とは、「法」の解釈を行う際に不可欠な「道徳的感情・道徳的観念」と表裏一体の関係にある精神的態度のことである。

第六章は本論文においては補論としての位置づけとなる。デュルケームの影響を受けた人物として、アナール学派の創始者として知られるマルク・ブロックについて取り上げた。アナール学派は、第三共和政成立当時に活躍したシャルル・セニョボスやシャルル・ラングロアらの実証主義歴史学を批判し、フランスの歴史学に心性史という新たな学問的見地を与えた。ブロックを心性史探求へと牽引したのはデュルケームであった。デュルケームは、比較史の方法によって人間性の多様な局面を知ることの必要性を説いている。しかし、人間の多様な局面を知るだけでは歴史学の役割は不完全であるとも主張した。彼は、時間と空間の隔たりを超えて人間性というものは本質的には同一であり、精神的態度や道徳性の形態はただ一つしか存在しないと主張した。このような歴史観に影響を受けたブロックもまた、同様の見解を、著書『比較史の方法』において述べている。

終章においては、デュルケームの「人格の相互承認」の思想が彼の学説において重要な意味を有していることを示した。ユダヤ教においては、神はどこか空想の世界にいるものではなく天上にいるものでもない。神は「善き人間」と「善き人間」の関係の中に存在する。デュルケームによれば、「人格の相互承認」を基盤とする道徳的連帯の成立しない社会では「法」は機能しない。ユダヤ教においては、人間にとって常に現実的な問題である「自己存在の理由」と「他者との関係」について長い間議論を続けてきた歴史がある。ラビたちは、トーラーを各々の時代に適応させて生活の中で実践させる方法を追究してきた。デュルケームの世俗道徳論は、ユダヤ教という長い歴史を持つ一つの宗教を基盤としている。しかし、その宗教が人間にとって常に現実的で根源的な問題を説き、実践させることを目指していた点で、やはり、彼の世俗道徳論は、実証的経験科学に基づく世俗道徳論なのである。つまり、彼が幼いころから学んでいたトーラーとユダヤ教の学問体系が彼の世俗道徳論の基調となっている。

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	平田文子
論文題目	デュルケーム世俗道徳論の中のユダヤ教： ユダヤの伝統とライシテの狭間で

1 審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	白鳥義彦
副 査	教授	増本浩子
副 査	教授	中畑寛之
副 査	教授	小山啓子
副 査	東京大学 名誉教授	市川 裕

2 論文審査の結果の要旨・・・・・・・・別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨・・・・・・・・別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果，論文提出者は博士（ 文学 ）の学位を得る資格があることを認める。

論文審査の結果の要旨

氏 名	平田文子
論 文 題 目	デュルケーム世俗道徳論の中のユダヤ教：ユダヤの伝統とライシテの狭間で
要 旨	
エミール・デュルケーム (Émile Durkheim, 1858 年－1917 年) は、一九世紀から二〇世紀へという世紀転換期のフランスにおいて、社会学という新たな学問を確立した、社会学の定礎者として社会学史のなかに位置づけられている。したがってデュルケームは、社会学史のなかで決定的に重要な位置を占め、今日においても古典として読み継がれるとともに研究が進められている。このデュルケームが、ユダヤ教ラビの息子であったことは伝記的事実としてすでに広く知られてきているが、これまでの通説として、彼はラビを受け継ぐことをせず、ユダヤ教信仰をも棄てて社会学者となったとされてきた。本論文は、フランス第三共和政下で進められたライシテ (非宗教化＝世俗化、政教分離) 政策という当時の文脈において、デュルケームがユダヤ教信仰を棄てて社会学者となったというこの通説を再検討し、ユダヤ教思想に根拠を置いてデュルケームの著作を再解釈することを新たに試みようとするものである。ユダヤ教の家系の出身であるという、これまで知られてはいても正面からの研究の主題としては従来扱われてこなかった観点から、デュルケームの思想に新たな光が当てられる。 「序章」では、先行研究の検討と本論文の目的の提示、本論文の背景としての、当時のフランス第三共和政期の教育改革とデュルケームの関係の検討、デュルケームの「社会観＝宗教観」という思想とユダヤ教との関係とといった、デュルケームの世俗道徳とユダヤ教思想との関連性の提起がなされる。 「第一章 ユダヤ教徒デュルケームの痕跡：ダヴィド・デュルケームの足跡」では、ヘブライ語筆記体によるデュルケームの割礼の記録、デュルケームを中世の偉大なラビの血筋にあると証拠づけたタルムード解釈本の手稿本、パリ市古文書館に残されているデュルケームの埋葬記録などをもとに、デュルケームの誕生から逝去までの、ユダヤ教徒としての足跡が辿られる。これらをもとに、デュルケームが表面上はユダヤ教の儀式には参加しなかったものの、プライベートの面ではユダヤ教徒として生きていたことが主張される。またユダヤ教徒の週刊誌におけるデュルケームに関する言及をもとに、ユダヤ教徒側からのデュルケーム像について述べられる。 「第二章 デュルケーム道徳論の舞台裏：フランスユダヤ政策下のデュルケーム一家」では、デュルケーム一家のフランスへの同化の状況が述べられる。ナポレオンの「ユダヤ教徒解放政策」について、政府からのユダヤ教徒への質問とユダヤ教徒名望家からの回答についての検証がなされ、また、同政策下においてデュルケーム一家がどのような対応を迫られてきたかが論じられる。さらに、ドレフュス事件をきっかけとして行われた、フランスにおける反ユダヤ主義に関するアンケート調査へのデュルケームの回答が取り上げられ、ユダヤ系出自についてデュルケーム自身が語った非常に限られた資料であるこの回答についての考察がなされる。 「第三章 デュルケーム社会的連帯論における道徳的原理：ユダヤ教の「法」概念に着目して」では、デュルケームの社会的連帯の概念をユダヤ教思想から解釈することが試みられる。デュルケームの社会的連帯論の基礎には人格尊重の概念がある。これを「ユダヤの本質」と言われるユダヤ教の根源をなす思想に根拠を置いて解釈し直すことにより、デュルケームの主張の意味を明らかにした。「ユダヤの本質」とは、人と人が有機的に結ばれている社会に神は存在し、そのような社会に人間の存在理由を自覚させる機能があるとするものである。	
主査記載 氏名(自署)	
白鳥 義孝	

「第四章 デュルケーム道徳理論の実践的性格：ユダイズムの現世主義的な性格に着目して」では、デュルケームの道徳教育論の実践的性格が、ユダヤ教思想に基づいたものであることが論じられる。デュルケームは、学校教育における道徳教育について、学校集団という現実的な生活の場のなかで道徳的行為を習慣化していく必要性を主張するが、こうしたデュルケームの道徳理論はユダヤ教の道徳的行為の習慣化という手法を基礎としていることが主張される。また、一九世紀のドイツで生まれたユダヤ学の一派の「信仰を生活の哲学」とする思想についての考察がなされ、デュルケームの父親がこの一派の影響を受けていたことにも着目しながら、デュルケームの世俗道徳論とユダヤ教の実践主義との関係が示される。

「第五章 ユダヤの法解釈とデュルケームの「集合意識」概念：一九世紀の独仏歴史学との関係も踏まえて」では、デュルケームの「集合意識」という概念を、ユダヤ教の成文法の解釈の際に必要な口伝律法との関係から検討し、この概念がユダヤ教思想に由来するということが論じられる。ユダヤ教には、文字として伝承されてきた「書かれた掟」と、文字にはされずに継承されてきた「口伝律法」とがあるが、歴史的な経緯として特に後者の口伝律法の参照が重視されてきた。デュルケームが、ラビの継承者として、ユダヤ教の聖書批判の方法・タルムード研究の手ほどきを受けていたことを考えると、彼の「集合意識」という概念は、ユダヤ教の法解釈にまつわるものであると考えることができる。ラビには、「書かれた掟」の解釈において、口伝律法とともに伝承されてきた一定の精神的態度で臨むことが要請されており、デュルケームの「集合意識」とは、「法」の解釈を行う際に不可欠な「道徳的感情・道徳的観念」と表裏一体の関係にある精神的態度のことであるとされる。

「第六章 マルク・ブロックの歴史教育観とデュルケーム：フランス実証主義歴史学批判との関係から」は、本論文全体のなかでは補論としての位置づけとなるものであるが、フランスの歴史学におけるアナール学派の創始者であるマルク・ブロック（1886年－1944年）に対するデュルケームの影響が取り上げられる。両人戦間期にあたる一九二九年にマルク・ブロックとリュシアン・フェーブルがストラスブールで創刊した『社会経済史年報』を拠点として生まれたアナール学派は、第三共和政成立期のシャルル・セニョボスやシャルル・ラングロワらによる実証主義歴史学を批判し、フランスの歴史学に心性史という新たな学問的見地を与えたが、ブロックを心性史の探求へと導いたのはデュルケームであった。ブロックの『王の奇跡』の中心的なテーマは「集合意識」や「集合表象」であり、デュルケームの思想からの大きな影響を見出すことができる。

「終章」では、「共通道徳が表示する規範」についてのデュルケームの見解が取り上げられ、デュルケームの「人格の相互承認」による世俗道徳論が、ユダヤ教を基盤としていることが示される。ユダヤ教においては、神はどこか空想の世界にいるものでも、天上にいるものでもなく、「善き人間」と「善き人間」の関係のなかに存在する。ユダヤ教においては、人間にとって常に現実的な問題である「自己存在の理由」と「他者との関係」について長い間議論が続けられてきた。ラビたちは、トーラーを各々の時代に適応させて生活のなかで実践させる方法を追究してきた。またデュルケームによれば、「人格の相互承認」を基盤とする道徳的連帯の成立しない社会では「法」は機能しない。こうした観点から、デュルケームの世俗道徳論はユダヤ教を基盤としており、彼が幼いころから学んでいたトーラーとユダヤ教の学問体系が彼の世俗道徳論の基調をなしているとされるのである。

本論文は、デュルケームのユダヤ出自という、これまで事実として広く知られてはいても具体的な研究としては深められることのなかった論点に基づき、今までにない新たな視点からのデュルケーム研究に果敢に取り組んでいる。また、そうした新たな視点を踏まえて、ユダヤ関係の原資料を含めこれまで分析対象とされてこなかった資料にも目を向けることにより、新しいデュルケーム像を提示している。すなわち、デュルケームについての従来の社会学的な研究にはない、本論文の有意義な点として、ヘブライ語にも立ち戻りながら、ユダヤ教の内容を検討し、それをデュルケームによる議論と結びつけていることを挙げることができる。一方、これまでのデュルケーム研究では、彼はユダヤ出自の土台からむしろ意識的に離れて第三共和政の学問的および社会的な状況にコミットしていったとされてきたことから、本論文には、「ない」とされてきたもののなかに、「ある」ことを見出そうとするある種の困難さも感じられるところも認められる。しかしそうした点は「パイオニア」であるがゆえの難しさであるともとらえることができ、本論文は、デュルケームの思想におけるユダイズムの影響というこの新しい研究領域の、今後の展開の礎となることが期待される。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者平田文子が博士（文学）の学位を授与されるに値すると結論に達した。